

高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会報
編集人 田村佐起三

〒六〇四一八〇〇一
京都市中京区木屋町通三条上ル
電話 (〇七五) 二二二二・二一八八

《吉田類の酒場放浪記訪問「土筆」さん》

元立誠小学校・現在ヒューリックホテル北向で大女将さんが待っていてくれました。私が初めて「土筆」訪問したのは昭和の終わりのころ、箱屋のケンちゃんの紹介でした。ご夫婦で約50年前に開業、大將は17年前に他界、現在は娘さんご夫婦で継続されています。このお店は昭和レトロそのもの、よくぞ残っていてくれました。
イラストレーターのかれふさんによると、「お店にはシルバー層主体の常連にたまに若いカップルも来て結構にぎわっている。一人でぼーっと飲んでもと京ことばがきれいな大女将や常連からは八千草薫似と評判の女将が適度に構ってくれて退屈しない。常連は大学関係者も多いみたいで酔いながらアカデミックな話で盛り上がりたりする。数年前、吉田類の酒場放浪記にも出たところとで「吉田さんの番組見たいはりましたん」と聞かれた。月に数組は今だに類フォロワーが来店してくるらしいけど、客筋もよく基本穏やかな雰囲気です。じっくり飲める店だ。京都は高めのお店が多いけど、ここは三千円ちょっとくらい。この店アタリだよ。」とのこと。

《没後50年 鏗木清方展》

5月27日～7月10日

令和4(2022)年は、上村松園と並び称された美人画家として定評のある鏗木清方(1878-1972)の没後50年目にあたります。本展はそれを記念して約110点の日本画作品で構成する清方の大規模な回顧展で、当館では初めての、京都でもこの規模の回顧展は実に45年ぶりの開催となります。
江戸の面影を色濃く残した東京に生まれた、生粋の明治東京人たる清方は、その生涯にわたり、江戸や東京にまつわる作品を多く残していました。その中の代表的な作品が、長らく行方が分からなくなっていた、平成30(2018)年漸くすがたを現わした「築地明石壇」です。本作品は、清方の代表作というだけでなく、近代日本画壇の美人画の最高峰に位置付けられてもいます。同時に現代日本「浜町河岸(新富町)」とあわせて東京国立近代美術館の所蔵となつたことから、同一法人内の美術館である当館でも三部作の全会期展示が実現！また、江戸・東京の風俗画だけでなく、戯作者であり、毎日新聞の前身にあたる東京日日新聞の創刊に関わった父・條野採菊の影響により知られる清方の「野崎村」や重要文化財に指定された「三遊亭月朝像」も会期中ずっとご覧いただけます。美人画だけではない清方の全貌をご堪能ください。

《オレオレ詐欺は許せない》常葉臺住職 今小路覚真

オレオレ詐欺による被害が一向に減りません。お年寄りの大切なお金をだまし取る行為に対して非難されるが、わたしにとつてオレオレ詐欺の行為が非難されるのは、もつと他にあります。現代は親子の情愛が薄くなり、殺ばつとした親子関係に変化しているように危惧されています。しかしこのオレオレ詐欺は、そうした親子関係の希薄化が、それほどでもないことを明かしてくれています。
特に親が子や孫に対しては、一方ならぬ深い情愛を傾けている様子がありありと示されているのがオレオレ詐欺の一面です。
嘘であっても何らかの理由で息子や孫が困っていると言ってくれば、大切な身銭を切つても助けたい、という親心がまだ強く働いているのです。であればこそ、そうした親の心を逆手に取るオレオレ詐欺は、なんととしても根絶しなければならぬのです。

《煩惱即菩提》 宗教学人 花鳥寺 土口哲光住職の説法

煮ても焼いても食えないわが心である。ノド元過ぎれば熱さ忘れるで、ケロリとしている。この元になるのが煩惱という人間の本能なのである。煩惱の煩とは、わが身をなやますもの、悩は心をなやますものである。このように煩惱とは、この身と心を煩わせ、悩ませ、かき乱し、惑わせ、汚す悪い心のはたらき、悪玉になる。人間はこの煩惱によつて、業という行動を起し、苦しみの報いを受け、迷いの世界に繋ぎとめられている。この本能を修行や智慧によつて断ち切り、悟りの菩提に向かうのが仏教の実践として説かれる。ところが、難行苦行である。そこで、厄介な煩惱・本能を善玉へと転換させる方途を講じる。例えば、シブ柿がシブを落とすと甘柿よりうまい柿になるように！

季節の家庭料理 田村真紀

《五月 鯖と新玉葱のトマト煮込み》
《作り方・四人分》 骨抜き鯖半身二切れ・新玉葱一個・黒オリーブ八個(縦に半分に分ける)・市販のトマトソース二百四十グラム・にんにく一片(薄切り)・オリーブオイル大匙二・塩胡椒少々・薄力粉適宜・白ワイン大匙三
鯖はさつと洗ひ水気をキッチンペーパーで丁寧に拭きとる。一口大のそぎ切りにし、塩胡椒をして薄力粉を全体に薄くまぶす。新玉葱は縦に薄切りにする。フライパンにオイル大匙一を入れ、強めの中火にかけ鯖を皮目から入れ両面こんがりするまで焼き一旦取り出す。フライパンをきれいにしておイル大匙一を中火で熱し、玉葱とにんにくをじっくり炒めて鯖を戻し入れ、白ワイン、トマトソース、オリーブを加えしばらく煮込む。

つれづれの記 山崎辰巳

《無意味な戦争の早期終結を！》
水や雪の競技から、主に緑映える芝生のグラウンドやフエアウェイに舞台を変えて今、スポーツシーズンたけなわである。このスポーツも戦いであり勝敗がつきものだが、個人競技であれ団体戦であれ、戦いが終われば対戦相手の健闘を称え、観る者に爽やかな感動を与え、清々しい余韻を残してくれる。
同じ戦いでも、世界が注視し関心と不安の的になつているのがロシアとウクライナの紛争である。詳しい政治的背景には疎く、軽々しい論評は控えるとしても、戦争が、いかに多くの人の生命を奪い、領地を破壊し、経済的損失と犠牲を生みだし、何の得にも利益にもならないことは過去の歴史を顧みてもまでもなく明らかである。独裁者プーチン氏が喧嘩腰の指示・命令を取り下げ、一日も早く和平への道が開かれることを願うのみである。